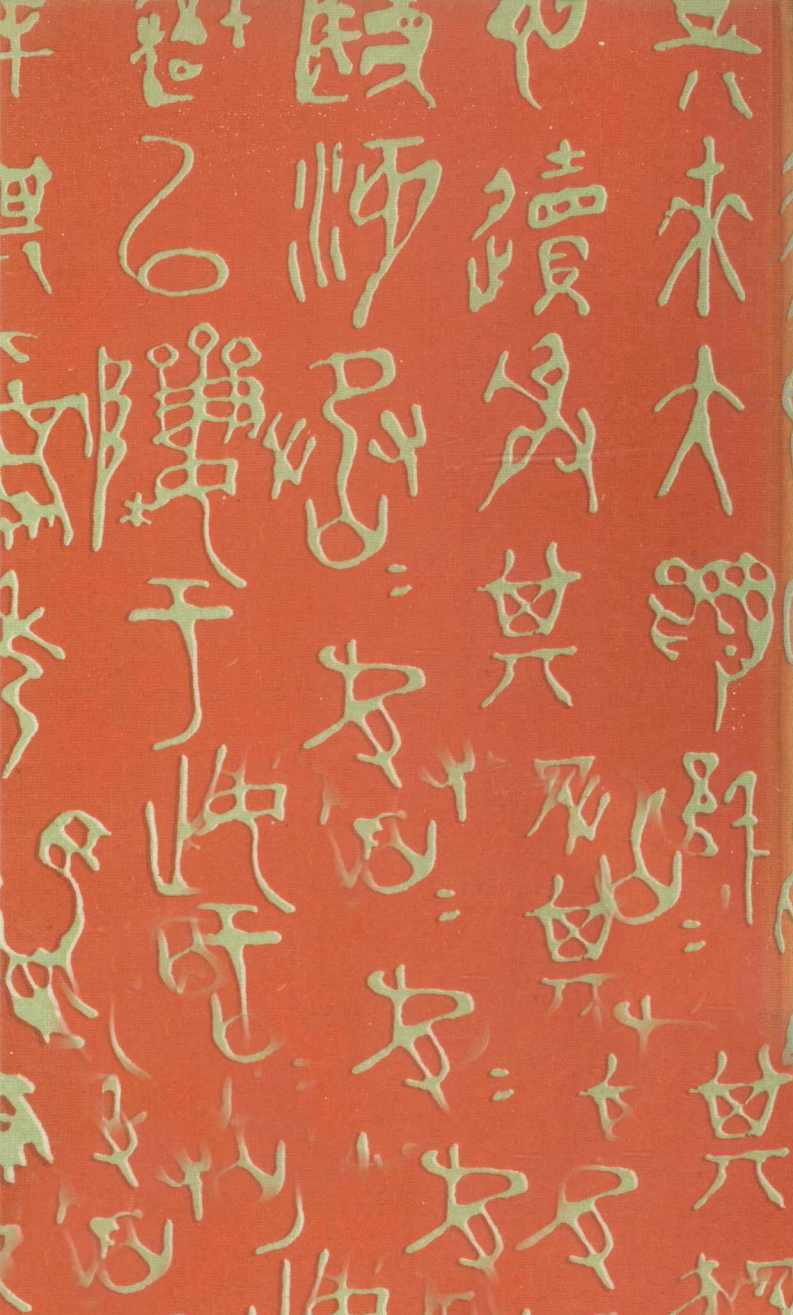

漱石全集
第二十二巻

初期の文章

全三十四巻　第二十二回配本

昭和三十二年四月十二日　第一刷發行　©　漱石全集　第二十二巻
定價一五〇圓

著者　夏目漱石

發行者　東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
岩波雄二郎

印刷者　東京都青梅市根ケ布三八五番地
山田一雄

發行所　東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三　株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

精興社印刷・永井製本

目次

小品

倫敦消息　七
倫敦消息　三〇
自轉車日記　四七

評論

老子の哲學　六一
文壇に於ける平等主義の代表者『ウォルト、ホイツトマン』Walt Whitman の詩について　七八
中學改良策　九三

英國詩人の天地山川に對する觀念　一三五
『トリストラム、シヤンデー』　一五五
英國の文人と新聞雜誌　一六八
小說「エイルキン」の批評　一七八
マクベスの幽靈に就て　一九四

雜　篇

『銀世界』評　二〇九
愚見數則　二一一
人生　二一七
無題　二二二
祝辭　二二三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

不言之言　二二四
無題　二三〇

作　文

正成論　二二三
觀菊花偶記　二二四
居移氣說　二二五
對月有感　二二六
山路觀楓　二二八
故人到　二四〇
故人來　二四二
母の慈　西詩意譯　二四四

二人の武士　西詩意譯　二四五
Japan and England in the Sixteenth Century.　二四六

翻　譯

催眠術（アーネスト、ハート）　二五一
詩伯「テニソン」（オウガスタス、ウード）　二五八
セルマの歌（オシアン）　二七二
カリツクスウラの詩（オシアン）　二七五
A Translation of Hojio=ki　二七七
解　說　二九九
注　解　三一一

小

品

倫敦消息

一

（前略）夫だから今日卽ち四月九日の晩をまる潰しにして何か御報知を仕樣と思ふ。報知し度と思ふ事は澤山あるよ。こちらへ來てからどう云ふものかいやに人間が眞面目になつてね。色々な事を見たり聞たりするにつけて日本の將來と云ふ問題がしきりに頭の中に起る。柄にないといつてひやかし給ふな。僕の樣なものが斯る問題を考へるのは全く天氣のせいや「ビステキ」のせいではない天の然らしむる所だね。此國の文學美術がいかに盛大で、其盛大な文學美術が如何に國民の品性に感化を及ぼしつゝあるか、此國の物質的開化がどの位進步して其進步の裏面には如何なる潮流が横はりつゝあるか、英國には武士といふ語はないが紳士と〔いふ〕言があつて、其紳士は如何なる意味を持つて居るか、如何に一般の人間が鷹揚で勤勉であるか、色々目につくと同時に色々癪に障る事が持ち上つて來る。時には英吉利がいやになつて早く日本へ歸り度なる。すると又日本の社會の有樣が目に浮んでたのもしくない情けない樣な心持になる。日本の紳士が德育、體育、美育の點に於て非常に缺乏して居るといふ事が氣にかゝる。其紳士が如何に平氣な顏をして得意であるか、彼等が如何に浮華であるか、彼等が如何に空虛であるか、彼等が如何に現在の日本に滿足して己等が一般の國民を墮落の淵に誘ひつゝあるかを知らざる程近視眼であるか抔といふ樣な色々な不平が持ち上つてくる。先達て日本の上流社會の事に關して長い手紙を書いて親戚へやつた。然しこんな事は只英國へ來てから餘慶に感ずる樣になつた迄でちつとも英國と關係のない話しだし、君等に聞せる必要もなし、聞き度事で

もなからうから先ぬきとして何か話さう。何がいゝか、話さうとすると出ないものでね、困るな。仕方がないから今日起きてから今手紙をかいて居る迄の出來事を「*ほとゝぎす」で募集する日記體でかいて御目にかけ様。出來事だつて風*來山人の生活だから面白可笑い事はない、頗る平凡な物さ。「オキスフォード」で「アン」を見失つたとか、「チエヤリングクロス」で決闘を見たとか云ふのだと張合があるが、如何にも憫然な生活だからくだらない。然し僕が倫敦に來てどんな事をやつて居るかが一寸分る。僕を知つて居る君等にはそこに少々興味があるだらう。

此前の金曜が「グード、フライデー」で「イースター」の御祭の初日だ。町の店はみんなやすんで買物抔は一切禁制だ。明る土曜は先平常の通りで、次が「イースター、サンデー」又買物を禁制される。翌日になつてもう大丈夫と思ふと、今度は「イースター、モンデー」だといふので又店をとぢる。火曜になつて漸く故に復する例である。内の夫婦は御祭中田舍の妻君の里へ旅行した。田中君は「シエクスピヤ」の舊跡を探るといふので「ストラトフオドオンアヴオン」と云ふ長い名の所へ行かれた。跡は妻君の妹と下女のペンと吾輩と三人である。

朝目がさめると「シヤツター」の隙間から朝日がさし込んで眩い位である。これは寢過したかと思つて枕の下から例のニツケルの時計を引きずり出して見るとまだ七時二十分だ。まだ第一の銅羅の鳴る時刻でない。起きたつて仕方がないが別にねむくもない。そこでぐるりと壁の方から寢返りをして窓の方を見てやつた。窓の兩側から中譯の爲に金巾だか麻だか得*體の分らない窓掛が左右に開かれて居る。其後に「シヤツター」が下りて居て、其一枚〳〵のすき間から御天道様が御光來である。ハヽー愈春めいて來て有難い、こんな天氣は倫敦ぢや拜めなからうと思つて居たが、矢張人間の住んでる所丈あつて日の當る事もあるんだなと一寸

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

悟りを開いた。夫から天井を見た。不相變ひゞが入つて居て不景氣だ。上で何かごと〳〵いふ音が聞こえる。下女が四階の室で靴でもはいて居るんだらう。部屋は益あかるくなる。銅羅はまだ鳴りさうな景色がない。今度は天井から眼をおろしてぐる〳〵部屋中を檢査した。然し別に見るものも何にもない。まことに御恥しい部屋だ。窓の正面に箪笥がある。箪笥といふのは勿體ない、ペンキ塗の箱だね。上の引出に股引とカラと*カフが這入つて居て、下には燕尾服が這入つて居る。あの燕尾服は安かつたがまだ一度も着た事がない。つまらないものを作つたものだなと考へた。箱の上に尺四方許りの姿見があつて其左りに「*カルヽス」泉の瓶が立て居る。其横から茶色のきたない皮の手袋が半分見える。箱の左側の下に靴が二足、赤と黑だ、並んで居る。毎日穿くのは戸の前に下女が磨いて置いて行く。其外に禮服用の光る靴が戸棚に仕舞つてある、靴ばかりは中々*大臣だなと少々得意な感じがする。若し此家を引越すとすると此四足の靴をどうして持つて行かうかと思ひ出した。一足は穿く、二足は革鞄につまるだらう、然し餘る一足は手にさげる譯には行かんな、裸で馬車の中へ投り込むか、然し引越す前には一足は慥かに破れるだらう。靴はどうでもいゝが大事の書物が隨分厄介だ。是は大變な荷物だなと思つて板の間に並べてある本と、煖爐の上にある本と、机の上にある本と、書棚にある本を見廻した。先達て「ロツチ」から古本の目錄をよこした「ドツヅレー」の「コレクション」がある。七十圓は高いが欲い。夫に製本が皮だからな。此前買つた「*ウアートン」の英詩の歴史は製本が「カルトーバー」で古色蒼然として居て實に安い堀出し物だ。然し爲替が來なくつては本も買へん、少々閉口するな、其内來るだらうから心配する事も入るまい、……ゴン〳〵〳〵そら鳴つた。第一の銅羅だ、此から起きて仕度をすると第二の「ゴング」が鳴る。そこでノソ〳〵下へ降りて行つて朝食を食ふのだよ。起

きて股引を穿きながら、子にふし銅羅に起きはどうだらうと思つて一人でニヤ〳〵と笑つた。夫から寢臺を離れて顏を洗ふ臺の前へ立つた。是から御化粧が始まるのだ。西洋へ來ると猫が顏を洗ふ樣に簡單に行かんのでまことに面倒である。瓶の水をジヤーと金盥の中へあけて其中へ手を入れたがあゝ仕舞つた顏を洗ふ前に毎朝カルヽス鹽を飲まなければならないと氣がついた。入れた手を盥から出した。拭くのが面倒だから壁へむいて二三返手をふつて夫から「カルヽス」鹽の調合にとりかゝつた。飲んだ。其から一寸顏をしめして「シエヴイング、ブラツシ」を攫んで顏中無暗に塗廻す。剃は安全髮剃だから仕まつがいゝ。大工がかんなをかける樣にスー〳〵と髭をそる。いゝ心持だ。夫から頭へ櫛を入れて、顏を拭て、白シヤツを着て、襟をかけて、襟飾をつけて「シヤツター」を捲き上ると、下女がボコンと部屋の前へ靴をたゝきつけて行つた。暫くすると第二のゴン〳〵が鳴る。一寸御誂通りに出來てる。夫から階子段を二つ下りて食堂へ這入る。例の如く「オートミール」を第一に食ふ。是は蘇格土蘭人の常食だ。尤もあつちでは鹽を入れて食ふ、我々は砂糖を入れて食ふ。麥の御粥みた樣なもので我輩は大好だ。「ジョンソン」の字引には「オートミール」……蘇國にては人が食ひ英國にては馬が食ふものなりとある。然し今の英國人としては朝食に之を用いるのが別段例外でもない樣だ。英人が馬に近くなつたんだらう。夫から「ベーコン」が一片に玉子一つ又はベーコン二片と相場がきまつて居る。其外に燒パン二片茶一杯、夫で御仕舞だ。吾輩が二片の「ベーコン」を五分の四迄食ひ了つた所へ田中君が二階から下りて來た。先生は昨夜遲く旅から歸つて來たのである。尤も先生は毎朝遲刻する人で決して定刻に二階から天下つた事はない。「いや御早ふ」。妻君の妹が Good morning と答へた。吾輩も英語で Good morning といつた。田中君はムシヤ〳〵やつて居る。吾輩は Excuse me といつて食

卓の上にある手紙を開いた。「エツヂヒル」夫人から此十七日午後三時に緩々御話しを伺ひ度から御出被下間敷やといふ招待狀だ。おや〳〵と思つた。吾輩は日本に居つても交際は嫌いだ。まして西洋へ來て無辯舌なる英語でもつて窮窟な交際をやるのは尤も厭ひだ。加之倫敦は廣いから交際抔を始めると無暗に時間をつぶす、御負にきたない「シャツ」抔は着て行かれず、「ヅボン」の膝が前へせり出して居てはまづいし雨のふる時抔はなさけない金を出して馬車抔を驕らねばならないし、夫は〳〵氣骨が折れる、金が入る、時間が費へる、眞平だが仕方がない、たまにはこんな醉興な貴女があるんだから行かなければ義理がわるい、困つたなと思つて居ると、田中君が旅行談を始めた。吾輩に「シエクスピヤ」の石膏製の像と「アルバム」をやらうと云ふから難有ふといつて貰つた。夫から「シエクスピヤ」の墓碑の石摺の寫眞を見せて、こりや何だい君、英語の漢語だね、僕には讀めないといつた。やがて先生は會社へ出て行つた。是から吾輩は例の通り「スタンダード」新聞を讀むのだ。西洋の新聞は實にでがある。始から仕舞まで殘らず讀めば五六時間はかゝるだらう。吾輩は先第一に支那事件の處を讀むのだ。今日のには魯國新聞の日本に對する評論がある。若し戰爭をせねばならん時には日本へ攻め寄せるは得策でないから朝鮮で雌雄を決するがよからうといふ主意である。朝鮮こそ善い迷惑だと思つた。其次に「トルストイ」の事が出て居る。「トルストイ」は先日魯西亞の國教を蔑視すると云ふので破門されたのである。天下の「トルストイ」を破門したのだから大騒ぎだ。或る繪畫展覽會に「トルストイ」の肖像が出て居ると其前に花が山をなす、夫から皆が相談して「トルストイ」に何か進物をし樣なんかんて「トルストイ」連は燒氣になつて政府に面當をして居るといふ通信だ。面白い。さうかうする內に十時二十分だ。今日は例の如く先生の家へ行かねばならない。先づ便所へ行つて三階の部

屋へかけ上つて仕度をして下りて見るとまだ十一時には二十分許り間がある。又新聞を見る。昨日は「イースター、モンデー」なので所々で興行物があつた。其雑報がある。「アクエリアム」で熊使ひが熊を使ふと云ふ事が載つて居る。熊が馬へ乗つて埒の周圍をかけ廻る、棒を飛び超える、輪抜けをすると書いてある。面白さうだ。此度は廣告を見た。「ライシアム」で「アーヴイング」が「シエクスピヤ」の「コリオラナス」をやると出て居る。先達つて「ハー、マジエスチー」座で「トリー」の「トエルフスナイト」を見た。脚本で見るより遙かに面白い。「アーヴイング」のも見たいものだ。十一時五分前になつた。書物を抱へて家を出た。

僕の下宿は東京で云へば先づ深川だね。橋向ふの場末さ。下宿料が安いからかゝる不景氣な處に暫く——ぢやない、つまり在英中は始終蟄息して居るのだ。其代り下町へは滅多に出ない。一週に一二度出る許りだ。出るとなると厄介だ。先づ「ケニントン」と云ふ處迄十五分許り歩行いて、夫から地下電氣で以て「テームス」川の底を通つて、夫から汽車を乗換えて、所謂「ウエスト、エンド」邊に行くのだ。停車場まで着て十錢拂つて「リフト」へ乗つた。連が三四人ある。驛夫が入口をしめて「リフト」の繩をウンと引くと「リフト」がグーツとさがる、夫で地面の下へ拔け出すといふ趣向さ。せり上る時はセビロの仁木彈正だね。穴の中は電氣燈であかるい。汽車は五分毎に出る。今日はすいて居る、善按排だ。隣りのものも前のものも次の車のものも皆新聞か雜誌を出して讀んで居る。是が一種の習慣なのである。吾輩は穴の中ではどうしても本抔は讀めない。第一空氣が臭い、汽車が搖れる、只でも吐きさうだ。まことに不愉快極まる。停車場を四許りこすと「バンク」だ。こゝで汽車を乗りかへて一の穴から又他の穴へ移るのである。丸でもぐら持ちだね。穴の中を一町許り行くと所謂 two pence Tube さ。是は

東「バンク」に始まつて倫敦をズツト西へ横斷して居る新しい地下電氣だ。どこで乘つてもどこで下りても二文卽ち日本の十錢だからかう云ふ名がついて居る。乘つた。ゴーと云つて向ふの穴を反對の方角に列車が出るのを相圖に、此方の列車もゴーと云つて負けない氣で進行し始めた。車掌が next station Post-office といつてガチヤリと車の戸を閉めた。とまる度につぎの停車場の名を報告するのが此鐵道の特色なのである。向ふの方に若い女と四十恰好の女が差し向いに座を占めて居た。吾輩の右に一間許り隔つて婆さんと娘がベチヤ〳〵話しをして居る。向ふの連中は雜誌を讀みながら「ビスケツト」か何かかぢつて居る。平凡な乘合だ。少しも小說にならない。

もう厭になつたから是で御免蒙る。實は僕の先生の話しをし度のだがね。餘程奇人で面白いのだから。然し少々頭がいたいから是で御勘辨を願はう。

四月九日夜。

二

又「ホトヽギス」が屆いたから出直して一席伺はう。我輩の下宿の體裁は前回申し述べた如く頗る憐れつぽい始末だが、そういふ境界に澄まし返つて三十代の顏*子然として居られるかと君方は屹度聞くに違ひない。聞かなくつても聞く事にしないと此方が不都合だから先づ聞くと認める。處で我輩が君等に答へるんだ、懸價のない所を答へるんだから、其積りで聞かなくつては行けない。

我輩も時には禪坊主見た樣な變哲學者の樣な悟り濟した事も云つて見るが、矢張大體の處が御存じの如き俗物だからこんな窮屈な暮しをして回*や其樂をあらためず賢なるかなと褒められる權利は毛頭ないのだよ。そんならなぜもつと愉快な所へ移らないかと云ふかも知れないが、其處に大に理由の存するあり焉さ。先聞き給へ。成程留學生の學資は御話しにならない位少な

い。倫敦では猶々少ない。少ないが此留學費全體を投じて衣食住の方へ廻せば我輩と雖も最少しは樂な生活が出來るのさ。夫は國に居る時分の體面を保つ事は覺束ないが(國に居れば高等官一等から五つ下へ勘定すれば直ぐ僕の番へ巡はつてくるのだからね。尤も下から勘定すれば四つで來て仕舞うんだから日本でも餘り威張れないが)兎に角是よりも薩張りした家へ這入れる。然るにあらゆる節儉をして斯樣なわびしい住居をして居るのはね、一つは自分が日本に居つた時の自分ではない單に學生であると云ふ感じが強いのと、二つ目には折角西洋へ來たものだから成る事なら一冊でも餘計專門上の書物を買つて歸り度慾があるからさ。そこで家を持つて下婢共を召し使つた事は忘れて、只十年前大學の寄宿舍で雪駄のカヽトの樣な「ビステキ」を食つた昔しを考へては夫よりも少しは結構? 先づ結構だと思つて居るのさ。人は「カムバーウエル」の樣な貧乏町にくすぼつてると云つて笑うかも知れないがそんな事に頓着する必要はない。斯樣な陋巷に居つたつて引張りと近づきになつた事もなし夜鷹と話をした事もない。心の底迄は受合はないが先學動丈は君子のやるべき事をやつて居るんだ。實に立派なものだと自ら慰めて居る。

然しながら冬の夜のヒュー〳〵風が吹く時にストーヴから烟りが逆戻りをして室の中が眞黑に一面に燻るときや、窓と戸の障子の隙間から寒い風が遠慮なく這込んで股から腰のあたりがたまらなく冷たい時や、板張の椅子が堅くつて疝氣持の尻の樣に痛くなるときや、自分の着て居る着物が漸々變色して來るにつれて自分が段々下落する樣な情ない心持のする時は、何の爲にこんな切り詰めた生活をするんだらうと思ふ事もある。エー構はない。本も何も買へなくても善いから爲替はみんな下宿料にぶち込んで人間らしい暮しを仕樣といふ氣になる。夫からステツキでも振り回はして其邊を散歩するのである。向へ出て見ると逢ふ奴も〳〵皆ん

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton